



# 県中いわて

令和7年9月1日 / 第266号

- 発行／岩手県中学校長会 ●代表／照井英輝（盛岡市立厨川中学校） ●事務局／〒020-0885 盛岡市紺屋町2-9（盛岡市勤労福祉会館2F）／電話・FAX 019(622)0572 ●ホームページ <https://www.iwate-jh-kochokai.jp/>
- 印刷／杜陵高速印刷／電話019(651)2110

## 東北地区中学校長会研究協議会山形大会 参集開催

### 研究主題「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の 創り手を育てる中学校教育」

第75回東北地区中学校長会研究協議会が7月3日（木）・4日（金）山形市やまぎん県民ホールを主会場に開催されました。岩手県からはほぼ全会員が参加し、全体会、分科会での研究報告および協議における情報交換を通して研鑽を深めました。

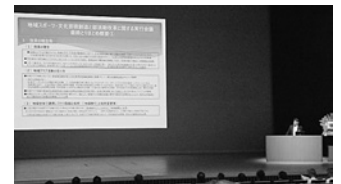
開会式において大会会長でもある東北地区中学校長会 細谷直樹会長は、「現代は、VUCA（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性）の時代と言われ、価値観の転換や予期せぬ出来事への対応の中で、校長は未来に目を向け、幅広い視野で学校経営に取り組まなければならない。また、本大会主題には、予測困難な時代において、必要な資質・能力を身に付け、持続可能な社会を担う人材を育てていくという決意が込められており、3分科会のテーマ同様、現行学習指導要領の核心でもある。今、その取組を検証し、これから取り組むべき方向性が見えてくる大会としたい」と大会意義について挨拶がありました。



開会式後は理事会報告が行われ、「令和7年度東北地区中学校長会宣言・決議」が読み上げされました。

全日中報告では、全日中校長会 青海正会長より、部活動の地域展開と学習指導要領の改訂について、協議の進捗状況が報告されました。部活動の地域展開は、急激な少子化が進む中でも、将来にわたって放課後や休日の生徒の心の居場所を確保すること、継続的にスポーツや文化芸術活動に親しむ機会を保証することを主たる目的とし、生徒が希望する活動を主体的に選択できる環境の整備（改革実行期間：令和8年度～）が大切であるとともに、今後は地域クラブ活動が学校部活動の教育的意義を保ちつつ、

地域全体で関係者の連携で支えていくことが重要だと、説明がありました。また、次期学習指導要領の改訂（改善の方向性）については、



論点①学校現場から遠い存在になりがちな学習指導要領の一層の構造化、内容理解を促進するために表形式や箇条書き表記、小、中、高の学習指導要領の系統性へリンクするようなデジタル技術の活用。論点②柔軟な教育課程の促進として、教科標準時数を下回ったことで生み出された授業時数の活用が国の審査なしで各校に委ねられる可能性。論点③一つの教育課程では対応が難しい子供の包摂として、個々の児童生徒に対応する特例の新設や拡充のある「2階建て」の柔軟な教育課程の編成。最後に論点④週当たりの時数を減らすことで余白を創出し、不測の事態への対応と教科書の重点化・分量の精選により、教育の質的な向上を目指す方向性が示されました。

記念講演会では、山形市出身の元WNBA選手で現在トヨタ自動車ヘッドコーチを務める大神雄子氏によるエネルギーな講演を拝聴しました。好き、楽しいは学び続けるのに必要な感情であること、そして、学びの三原則はインプットよりアウトプット、成功体験より失敗体験、予習より復習と、バスケットボールを通して体得されたことを、学校教育にもつながる視点でお話いただきました。

二日目の分科会では、本県から盛岡市立洪民中学校 小松山浩樹校長が第1分科会で発表し、盛岡市立城西中学校 大越淳校長が協議の司会を務めました。確かな学力の育成を図る学校経営について、学校の現状や特色に適したカリキュラム・マネジメントの構築や教科学習と社会を新聞で結びつける実践について、研究の成果を発表されました。

## 先輩メッセージ

「頼りになる校長会」  
～不易と流行の中で～

柏木 廣喜 様  
(前花巻中学校長)



「令和」という新しい時代の幕開けから7年が経過しようとしている現在、「学力向上、いじめ、学校不適応、部活動の地域移行、働き方改革、猛暑、流行する疫病」など、学校をめぐる問題が報道されるたびに、万里一空の精神で学校を経営されている校長先生方のご労苦はいかばかりかと推察いたします。

現職時代を思い起こせば、私も山積する教育課題と対峙するための指導案作成に頭を悩ませる毎日でしたが、実はその解決に向かうための羅針盤は、身近な「校長会」という組織&仲間の中にありました。盛岡市・遠野市・中南米・花巻市と4つの校長会でたくさんの校長先生方と出会い、昼夜を分かたず、また国境を乗り越え、情報を共有して相談・議論できたことは、私にとっての貴重な財産です。

中でも、令和2年に襲来した「新型コロナウイルス」という見えない敵は、「花巻市中学校長会」のおかげで乗り越えることができました。日々の教育活動に加え、対外試合や合同練習、体育祭や応援、修学旅行、地区中総体、市中陸上、文化祭、連合音楽会など、矢継ぎ早に求められる校長としての判断に際して、何とか「学校の方針」を示すことができたのは、花巻市中学校長会11名の連携のおかげでした。幸いこの11という数は素数であり、1と11しか約数はありません。1は各校長がそれぞれの学校で手腕を発揮する場、また11は全員で情報共有・議論・調整・判断をする場でした。

ルソーは著書エミールの中で次のように述べています。「植物は栽培によって、動物は調教によって、そして人間は教育によってつくられる」。これが教育における「不易という縦糸」だとするならば、そこに「令和の日本型学校教育や喫緊の教育課題への対応」といった「流行という横糸」を織り込むのが、校長先生方の役割であると拝察いたします。

激動の時代ですが、皆様お体をご自愛なさり、校長会という組織を有効に活用して、「岩手の抜けるような青空のように聡明で、三陸の海のような深みのある子どもたち」の育成に向け、ご尽力下さい。

## 先輩メッセージ

## 「最善を尽くして」

菅野 美保子 様  
(前高田第一中学校長)



私が校長になったのは平成31年4月でした。前年までの副校長の立場とは異なり、責任の重さを実感する日々でした。立場が変わると一つ一つの行事について、それまでとは違う角度から考えるようになるのだと実感した1年でした。

あと1か月ほどで卒業式を迎えようというときに、新型コロナウイルスが拡大し始めました。それからの1年は前年までとはまったく異なっていました。修学旅行をはじめ、運動会や文化祭という大きな行事をどうするか、教育委員会や地区校長会等の方針のもと、自分の学校ではどうするかという難しい判断の連続となりました。保護者の意見も一つにまとまることは難しいものでした。特に修学旅行については、新型コロナウイルスの感染症対策を万全にしてぜひ行かせたいという意見と、生徒が感染すると家庭や仕事に支障が出るので中止してほしいとの意見に分かれ、何度も何度も話し合いをしました。新型コロナウイルス感染症からの2年間は、感染症対策のみならず一人一台タブレットの導入や部活動等の対応など以前とは異なる課題もたくさんあり、すべてが手探りでした。その時の決断が良かったのかどうか、今でも自問自答することがあります。

最近、新聞等で県立高等学校の再編を目にする機会が増えました。また近隣の市でも統合計画が出されました。少子化が、急速に進んでいるような感じがします。この3年間で、孫が3人生まれ、これからの時代はどうなっていくのだろうという不安がより強くなってきました。私たちが経験したことのない多岐にわたる課題が出てくることが予想されます。それまで当たり前と思っていたことが当たり前ではなくなることもあるでしょう。校長の存在がより重要になってきます。今できる最善を尽くしてほしいと思います。後になって反省することはあるかもしれませんが、最善策の積み重ねが、素晴らしい学校経営に結び付くと思います。

## 新任校長の抱負

「個々の持ち味を生かした  
学校づくり」を目指して

和賀地区

泉田 学（沢内中）



本校は、奥羽山脈に囲まれ、県内随一の豪雪地帯として知られるなど、豊かな自然と、そこに息づく歴史と文化が魅力の地域に学区を有しています。令和4年に創立50周年（近隣4中学校を統合）を迎えた本校ですが、令和10年度から、小中一貫校として、新校舎で新たな歩みをスタートする予定です。

今年度の全校生徒は31名と少子化の波に直面している本校ですが、赴任当初から少人数を感じさせない生徒たちの頑張りに感心させられる日々が続いています。生徒会スローガンは「躍進」。生徒たちは、あ（挨拶）じ（時間）み（身嗜み）そ（掃除）ま（マナー）も（モラル）る（ルール）を合言葉として、日常生活の向上や学習、部活動等に、意欲をもって取り組んでいます。

5月の運動会では、全6種目、係活動と一人何役もこなしながら、とても感動的な運動会を創り上げました。これまで、小規模校での勤務経験がなかった小職にとって、競技を終えたばかりの生徒がすぐ別の競技に参加したり、係活動に取り組んだりと当たり前のようにこなしていく姿から雄大過酷な自然と共存してきた地域の人々の暮らし、豪雪に負けない強い精神の根付きを感じました。

こうした生徒たちの大車輪での活躍を支えているのは、これまた小規模校ならではの教職員集団の大車輪での仕事ぶりです。生徒たち同様に一人何役もこなされながら日々真摯に教育実践にあたっていたいております。校長として、働き方改革を推進しつつ、教職員個々の持ち味を生かしながら、ベクトルを同じくして、どう学校づくりにあたっていけばよいか自問自答する毎日が続いています。最大の受益者である生徒（保護者・地域）に対して懇切丁寧であることを軸に、生徒たちが、学び合い・支え合い・高め合える教育活動の推進に微力ではありますが努めて参ります。10月には、学校公開を予定しております。是非多くの方々にご来校いただきご指導賜りたく存じます。

## 新任校長の抱負

## 田老一中に赴任して

宮古地区

千葉 重徳（田老一中）



校歌の歌詞に「太平洋を目のあたり 後ろに高き山の幸」とあるように、田老は海と山に囲まれた、自然豊かな町です。

そして、過去には3度、大きな津波被害に遭った町でもあります。しかし田老の先人たちは、海から離れるのではなく、海と共に生きることを選びながら、その甚大な被害を乗り越えてきました。田老は、そんな生きる強さ、生活する逞しさが感じられる地域です。

本校では、東日本大震災当時の生徒会長の「田老の先人の跡を継ぐのは田老一中の生徒です」という言葉をよりどころとして、復興教育に力を入れて取り組んでいます。3年生から1、2年生に学びの成果を伝える会が4月にありますし、2年生は復興教育に係る他校との交流の場があります。また、文化祭では、学んだことを後世に伝える一つの形として「劇」を自分たちの手で企画し、地域の方に観ていただく取り組みもあります。

この4月、本校に赴任し、生徒たちの学びの様子を見るにつけ、私自身が復興について「教科書を読む程度」の浅い学びであったことに気付かされました。生徒たちは当時生まれたばかりかまだ生まれていない、つまり震災の記憶がない世代です。しかし、自分の家族、地域の方など、直接、震災を経験している方が身近におり、残されている写真や記事等、たくさんの資料をよく調べ、自分事のように田老の災害や復興について深く学んでいます。

その様子を見ながら私は校長として、本校の教育理念である「夢や目標をもち、ふるさと田老の発展に貢献する人づくり」を精一杯進めていかななくてはならないと改めて感じているところです。

まずは私自身が田老について深く学ぶ必要があります。そして、先生方が一丸となれるようリーダーシップを発揮し、また、地域の方の協力もいただきながら、精一杯頑張っていきたいと思っております。

## 新任校長の抱負

## 「野田村の太陽」としての誇り

久慈地区

小松 順一（野田中）



東日本大震災で村の住家約3分の1が流失・全壊・半壊等の被害を受け、深い悲しみや絶望感が村全体を覆う中、自分たちは何もできないけれど、せめて元気に頑張る姿を見せようという使命感を抱いた生徒たちは、「野田村の太陽になろう」を掲げ、以来、この言葉に込めて、様々な取組を重ねてきました。

学校行事や地域行事では、創作太鼓や野田中ソーランを披露したり、ボランティアとして一緒に活動したりしながら、地域と一体となった教育活動を進めています。また、総合的な学習の時間では、学年毎にテーマを定め、ふるさと野田村を愛し、その復興・発展を支える人材の育成に取り組んでいます。

5月に行われた体育祭では、運動や応援が苦手な生徒や支援が必要な生徒もいましたが、どの生徒もソーラン、創作太鼓、競技のすべての活動で練習から本気で取り組み、それを全力で支えようとする真摯な教職員の姿がありました。体育祭当日は、生徒全員が参加し、教職員や地域の方々も含めてみんなで感動することができ、これこそが「野田村の太陽になろう」と決意した十四年前の子どもたちと地域の人たちの姿であると実感した瞬間でもありました。

新任校長として赴任した時、歴代の校長のような職責を担えるだけの力量もなく不安と戸惑いばかりの中でしたが、生徒たちの挑戦する姿やそれを支える教職員、地域の温かさを目の当たりにして、大事なことは、「失敗を恐れずみんなと力を合わせて、前を向いて挑戦する」ことであると気づかされました。

震災から十四年経ちましたが、本校では一日たりとも震災を忘れることなく「野田村の太陽」としての誇りを持ち 震災の経験や「野田村の太陽になろう」と決意した当時の生徒たちの想いをしっかりと語り継ぎ、これからも地域の未来を担う「ひとづくり」に努めていきたいと思えます。どうぞよろしく願いいたします。

## 新任校長の抱負

## 地域とともに

二戸地区

川村 文孝（九戸中）



本校は、かつて八戸藩の飛び地があった志和と八戸を結ぶ「志和米街道」に沿って集落が形成された、九戸村の中央部に位置しています。県立自然公園・折爪岳を仰ぐ、四季折々の美しさに恵まれた自然豊かなふるさとで、毎朝、子どもたちは元気いっばいに、まっすぐなあいさつを交わしています。

昭和54年の開校当初には450名余だった生徒数も、現在は110名。そうした中であって、地域の皆様の教育への期待は非常に大きなものがあります。「子どもは村の宝」これは、九戸村の方々から自然に口にされる言葉です。「小さな村だからこそ、一人ひとりの成長が地域全体の喜びとなり、希望となっていく」そのようなお話を折に触れて何うたびに、地域とともに未来を担う子どもたちを育てていくことの重みと意義をあらためて感じています。

本年度の生徒会スローガンは「煌（きらめき）」。この一文字には、一人ひとりが全力で挑戦し、それぞれの光が集まって、やがて全校生徒で一つの大きな光を放てるような学校にしたい、という願いが込められています。その想いを体現するように、子どもたちは地域の皆様のご協力をいただきながら、郷土芸能やふるさと学習、地元でのキャリア学習等に積極的に取り組んでいます。そうした姿からは、未来に向かって力強く歩もうとする希望とたくましさを感じられます。子どもたちが九戸村の魅力に気づき、この地に誇りをもてるような教育を実現することこそが、私たち学校の大切な使命であるとの思いを新たにしております。

とはいえ、私自身まだまだ未熟で、見通しが持てずに迷う場面も少なくありません。そのたびに、ご縁をいただいた二戸地区の校長先生方や、村教委の皆様から温かいご助言やお力添えをいただきながら、職員とともに知恵を出し合い、一歩ずつ歩みを進めているところです。今後も、教員と生徒との信頼関係を築き、地域の皆様の思いをしっかりと受けとめながら、豊かな人間性を育む「人づくり」に力を尽くしてまいります。

## 私の学校経営

こめられた思いを  
根底に

盛岡地区

佐々木 康隆 (飯岡中)



玄関を入り、最初の扉を開けると多目的ホールが位置する特徴的な造りの現校舎。盛岡市と旧都南村合併直前に建築されています。まもなく、本校は創立80周年を迎えます。多目的ホールの壁には、開校以来の校訓「百折不撓」の4文字が青地に白文字で掲げてあります。

今年度、次の3つを教職員に伝え、全員で子どもたちの成長を支援するべく、教育活動を行っています。

## 1 明確な目標の設定とクリアに向けた意欲の喚起

目標は行動の方向性を示すもの、指標です。生徒に目標を持たせ、努力する姿勢の大切さを説いていきましょう。そのためにどんな自分になりたいのか大きな目標(夢)とそれに到達するための小さな目標の組み合わせが大切です。小さな目標は、より具体的に考えさせましょう。

## 2 自分と他人の違いを知り、相手のよさを認め合える心情の育成

世の中は自分と他者で成り立っています。幼いときは親に守られながら自分を中心に思考したり行動したりします。それでよいと思います。一方、社会は周囲とのつながりや関わりぬきでは成立しません。その途中にある中学生時代に学ぶべき一つは自分と他人の違いです。自分のよさを自覚させるとともに、相手のよさも認められる生徒を育てましょう。『同じを知り、違いを理解する』。

## 3 なぜの視点をいかした計画立案と改善点の共通理解

Know-How「どうしたらよいか」とともにKnow-Why「なぜ、そうしなければならないか」の視点を持ち、計画の立案をお願いします。一年後に子どもたちがどのように成長しているか(してほしいか)をイメージしながら計画を練ること。失敗をおそれすぎずに。思い切るときは思い切って。実行・実践後は、改善点を共通理解し、次のステップにつなげましょう。

本校に赴任して2年目、節目、節目に、校訓の4文字に込められた思いを生徒に伝え、先人の願いと引き継ぐべき心持ちを教職員で共有していこうと考えています。

## 私の学校経営

「自ら育つ」～教職員が主体性を  
発揮できる風土づくり

一関地区

菅原 理日 (一関東中)



現代は予測不能な時代といわれますが、これまで延べ30に近い国々を自分の足で歩き様々な人たちと出会い、世界の変化と恐ろしいほどのパワー・スピードを肌で感じています。若い頃から一貫している私の夢は「人が、人として、人と共に生きる社会」を「若い人たちが自身が探りながら築いていく」こと。生徒には、様々な障壁を超えて互いに「人として敬意」を払い、「各々の持ち味」を生かして支え合い「共に前に進もうとするあたたかさ」を育てたい。各々の持ち味、一人一人を大切にすることは「多様性の受容」と「単純な対立構造に持ち込まないための理性と技術」によって裏付けられます。本校教育目標は半導体研究で知られる故西澤潤一先生によるもの。「自ら求め」「自己決定」を合言葉に、たくさんの挑戦を通し、あたたかさをもって人とつながる経験ができるような教育活動を進めていきたいと考えています。

私の学校経営の核は、そのための「環境整備」。特に教職員が主体性を発揮できるような風土づくりに努めています。教職員同士が安心して繋がり合い挑戦する姿は、生徒の心理的安全性や挑戦意欲の大きな土台になると考えるからです。

例えば、イクボス宣言により教職員皆と共に歩む決意を示し安心を共有した上での学校経営方針プレゼン。信頼して職務を任せられる傍ら、教職員個々の可能性を引き出すための自らの学び。折々に発行する「校長のひとり(みんな)ごと」による視点や価値観の共有。日々の「会話」「対話」や面談での実践の価値づけ。教育理論や実践のヒントとなるお勧め書籍コーナー作りと個々への文献紹介。教職員が自由に語り合う部活動休養日の「Café de 校長室」(三者面談前には先輩教員たちが初任者とロールプレイングに興じたことも)等々…。学級数半減、教職員の年齢構成もアンバランスな本校ですが、互いへの敬意と学び合い、不平不満や要求要望ではない教職員一人一人の主体的な経営参画に、頼もしさを感じています。

人はそれぞれ異なる持ち味や強みを持っています。教職員個々の持つ強みへの信頼を軸に、「自ら育つ」意欲を引き出すことで、先の見えない未来を生き抜く力の育成と教育活動の活性化につなげたいと考えます。教職員の主体性は、生徒への何より心強い刺激になると信じています。

# 各地区校長会活動 NOW

## 岩手地区校長会



「しあわせや」がくれたもの  
～子どもたちや学校のウェル  
ビーイングの実現に向けて～

熊谷 一史 (西根一中)

### 1 はじめに

岩手地区校長会中学校部会は、八幡平市4校、滝沢市6校、雫石町1校、葛巻町3校、岩手町3校の計17校で構成されています。会員相互の協調のもと、連携と親睦を図りながら、校長としての識見や力量の向上を目指し活動を積み重ね、当面する教育諸課題の解決を図る取組を推進してきました。

### 2 本年度の主な活動方針

- (1) 学校経営上の課題に対し、創造的で開かれた学校経営の改善と充実を図る。
- (2) 学習指導要領の着実な実施と、教育課題を踏まえた研究や実践活動の充実を図る。
- (3) 教育諸条件に関する調査及び教育環境改善の具体化に係る活動の充実を図る。
- (4) 会員及び市町校長会相互の理解と連携強化を促進し、諸事業の充実を図る。

(5) 進展する情報化や教職員のウェルビーイングの向上に向けた学校における働き方改革への対応を推進する。

### 3 本年度の主な活動内容

(1) 全体研修会の実施  
今年度は、生徒指導に関する研修会と、日本教育会岩手県支部岩手地区会及び副校長会と合同での講師を招いての研修会を実施します。

(2) 研究の推進

研究主題は「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく力を育てるための学校経営の改善・充実に向けて」を掲げています。研究大会を実施し、各学校や地域の実態に即した学校経営の諸問題について研究協議を行います。

(3) 会報「いわて」の発行

### 4 おわりに

過日行われた東北地区中学校長会研究協議会山形大会において、県全体での情報交換会の後に、岩手地区の中学校長会で、山形の地ものものを食べながら、さらに親交を深めました。「しあわせや」というお店でした。我々校長が様々な教育課題に挑戦し、学校経営の改善・充実を図ること、そして、子どもたちや学校のウェルビーイングの実現に向けて思いを強くしたところです。

## 遠野地区校長会



「三人寄り添って」遠野の  
教育課題に向き合う

菊池 一洋 (遠野西中)

### 1 はじめに

遠野地区校長会は、遠野市3校の中学校で構成される小規模の校長会である。市並びに県の教育や校長会の様々な役割を兼務しながら、「三人寄れば文殊の知恵」のごとく、相互に情報を共有しながら率直な論議を重ね、教育の充実や課題の解決に向けた活動を行っている。そして、市小学校長会との連携を大事にしなが、共に協力し合っ活動している。

### 2 本年度の活動方針

- (1) 学校経営に最善を尽くすため、会員相互の連携と交流を大切に、校長会の活動を充実させる。
- (2) 学校経営上の諸課題に対し、会員同士協力し合い、連携を図りながら解決に努める。
- (3) 小・中連携を一層強め、効果的・効率的な研究・研修の実施や校長会の運営に努める。

### 3 本年度の活動内容

(1) 学校経営の充実に資する研究・研修の推進  
(小・中校長会が連携して実施)

・特別支援教育の充実に向けた取組(次年度の県研究大会での発表も想定して)  
・危機管理や防災に関する取組

(2) 教職員の資質向上と時代を担う人材の育成  
・管理運営研究会の開催(副校長会と共催)  
・働き方改革に資する共通取組の実施

(3) 社会教育関係機関との連携を深めた地域の教育振興

・キャリア教育、地域学校協働活動の充実

(4) 遠野市の教育課題の解決に向けた取り組みの充実(中学校区CSの推進、学力向上、学校不適応、部活動の地域展開、教育DX等)

(5) 会員相互の連携と交流の推進

年間計画に基づき、小・中合同で活動を行うことが基本となっている。諸会議や研修会の後に、小・中学校で情報交換を行っている。

### 4 おわりに

教育を取り巻く社会の変化や各校の生徒数や職員数の減少の中、令和の日本型学校教育を実現していく必要がある。そのためにも、小さな中学校長会であるが、遠野の子どもたちのために、中学校同士や小学校との連携を大切に取り組んでいきたい。

# 各地区校長会活動 NOW

## 胆江地区校長会



### 胆江地区すべての生徒の成長を願って

鈴木 雅孝 (江刺第一中)

#### 1 はじめに

胆江地区中学校長会は、奥州市7校、金ヶ崎町1校の計8校で構成されている。会員8名のうち地元校長は5名、他市町村に生活根拠地がある校長は3名。また女性校長は2名。少ないメンバーながら、いつも多様な視点から活発な意見交換や情報交換がなされている。

#### 2 本年度の活動方針

職務遂行に関わる研修を通して、学校経営の充実に資するとともに、新しい時代の教育理念を実現し、特色ある開かれた中学校教育の充実発展に努め、会員相互の親睦と融和を図り、目的達成に努める。

#### 3 本年度の主な活動内容

- (1) 学校経営研究会  
地区内中学校を訪問し、授業参観や会場校の校長による経営説明、質疑等を通じて、自

校の学校経営に資する研修の場を年2回設けている。

- (2) これからの行事や部活動等の在り方検討  
アフターコロナや働き方改革、生徒数減少等を踏まえ、行事の持ち方や部活動の在り方など、機会をとらえて意見交換や情報共有を行い、現在そして今後を見据えた対応について検討を重ねている。
- (3) 地域資源活用の在り方についての共同研究  
研究主題を「学校教育目標の実現を目指したカリキュラム・マネジメントの実践 ～地域資源を活用した教育活動を通して～」とし、各校の実践を持ち寄りながら1月の研究発表会に向けて成果をまとめている。
- (4) 教育活動充実に向けた中高連携  
年2回、県高等学校長協会奥州支会との意見交換の場を設け、系統的なキャリア教育や情報モラル教育、適切な進路指導、学力向上等、多様なテーマで話し合いを行っている。

#### 4 おわりに

教育課題が山積する現在の学校現場において、身近にいつでも相談できる仲間がいることがとても心強い。もちろん、問題点を話し合うだけでなく、お互いの生徒たちの成長を願い、様々な場での活躍を喜び合う関係性をこれからも大事にしていきたい。

## 一関地区校長会



### 相互連携を大切にし、充実した学校経営を

菅原 正浩 (大東中)

#### 1 はじめに

一関地方校長会中学校部会は、一関市内14校、平泉中学校の計15校で構成されています。4月に3名の新入会員を迎え、会員相互の情報交換を密にし、小学校長会とも連携しながら学校経営の充実のために活動しています。

#### 2 本年度の活動方針

- (1) 会員相互が情報や資料提供を行い、現状や課題を的確に把握し充実した学校経営に努める。
- (2) 関係教育機関との連携を密にし、学校経営上の課題解決に努め、適切な学校運営にあたり中学校教育の振興を図る。
- (3) 部活動の地域移行、働き方改革等について積極的な情報交換と改善に努める。
- (4) 会員相互の連携と親睦を深め、事業の円滑

な運営を図る。

#### 3 本年度の主な活動内容

- (1) 各種研修会の実施  
中学部会定例研修会を年5回開催し、学校経営に係る情報交換を実施し、学校経営の充実に努めています。また、中高・特支・高専校長連絡会研修会を開催し、高等学校長会との連携を図り、進路指導の充実に努めています。
- (2) 研究の推進  
「子どもたちの多様化に対応する『令和の日本型学校教育』実現のために～教師に求められる資質能力を育成する学校経営～」を研究主題とし、各校の実践を交流し、取組の充実を図っています。

#### 4 おわりに

一関地区は広域であり、各中学校とも地域の実態に即した特色ある学校づくりに努めています。生徒指導、部活動の地域移行、働き方改革など多くの教育課題に対応していくためには、より校長間の連携を密にした組織力の向上が重要です。今後も会員相互の連携を図り、学校経営に係る研修を積み重ねながら、様々な教育課題に対応していきたいと思えます。

## 7・30 カムチャッカ半島地震による津波警報 その時、学校は…

### <陸前高田市立高田第一中学校では>

令和7年7月30日午前8時半頃、陸前高田市の防災無線で津波注意報が知らされた。市教育委員会と学校では、津波注意報が出された場合、解除となるまで生徒を下校させないという取り決めがある。すでに学校には100名ほどの生徒がおり、学校は保護者に一斉メールを通じて生徒の学校待機を連絡した。その後、注意報は津波警報へと切り替わり、昼過ぎまで発令が継続する可能性が濃厚となった。

学校には生徒用の備蓄食料300食（東日本大震災当時の在籍生徒数に相当）があり、昼食としてレトルトのカレーライスが生徒に配給した。また、おやつとしてスティックパンも配られた。夕方になっても警報は解除されないため、夕食も必要となった。カレーライスの在庫はあるものの、昼食とは別な物を配る配慮がなされ、避難市民用の備蓄食料であるドライカレーが配られた。また、夕方には市からパンと麦茶も支給された。

21時少し前に津波警報が注意報に切り替わり、市教育委員会とのやり取りの中で、生徒の保護者への引き渡しが可能となった。学校から、引き渡しにあたっての説明と方法を一斉メールで配信。徒歩での帰宅はさせないこと、保護者または保護者から依頼を受けた大人のみへの引き渡しとなることを連絡。引き渡しカードを記入してもらった場所を6か所設置し、100名の生徒の引き渡しを完了したのは21時40分であった。

12時間余りの学校待機の間、生徒を安心させる工夫として、勉強やDVD視聴、ゲームの他に、偶然居合わせたスクールカウンセラーによるリラクゼーションエクササイズも行われ、混乱や不安を与えない配慮がなされた。

### <釜石市立唐丹中学校では>

エリアメールにより、津波注意報を知った学校は、生徒の安否確認を行った。ほとんどの1・2年生は在宅だったが、学校に到着していた生徒が1名、家を出て学校にまだ到着していない生徒が1名だった。学校に到着した生徒については、保護者へ連絡し、津波到達時刻までに十分時間があること、自宅が津波浸水区域にないことを確認し、保護者に引き渡した。並行して教員による、学校にまだ到着していない生徒の搜索も行った。浸水区域にある自宅から学校までの通学路と立ち寄りそうな友達の家を探した

が、見つからない。搜索範囲を広げたところ、地区集会所に生徒がいるのを発見した。そこは、浸水区域外の避難所で、生徒が自ら判断して避難をしていたことが分かった。

3年生は、市内内陸部に位置する高校の体験入学に参加中だった。高校の指示に従いながら、引率教員・学校・保護者と3者間で連絡を取り合い、12時30分頃までに全員保護者に引き渡した。

その後、学校は駆け付けた地区公民館職員とともに避難所を開設した。本来体育館が第1の避難所となっているが、工事中だったことと高温であることから、エアコンがある校舎棟の多目的ホールに開設することとした。一般避難者は地域の高齢者1名、郵便局職員4名、同じ敷地内にある学童保育の児童・職員合わせて7名だった。その後、エアコンの効きが悪いことから、学童の7名を図書室、一般避難の5名を会議室に移動した。その間、備蓄倉庫から水と非常食の搬入、教室から扇風機と体育館から冷蔵庫の移動に職員が分担して当たった。避難所は、基本的に公民館職員が運営し、本校職員は補助及び避難者の話し相手をした。市役所本庁職員は17時頃到着した。時間の経過とともに児童も順次帰宅し、避難者が0人となった17時30分に市教委と市職員と協議し職員を帰宅させた。管理職も18時40分に帰宅した。

### <両校の緊急対応を伺って>

高田一中では、今回はライフラインの寸断がなく、住宅等の被害もなかったため、避難所の機能が十分発揮されたとのことでした。速やかな引き渡しと感じますが、学校はよりスムーズな引き渡しを行いたいと考えていらっしゃるようです。

唐丹中では、家庭訪問等で生徒の自宅や地域の避難場所の把握の必要性を痛感したとのこと。また、管理職は3回の避難所開設の経験をおもちで、校舎や地域を熟知しており普段からの地域とのつながりもあることから、臨機応変な対応と地域との連携が可能であったと語っていらっしゃいました。

両校とも緊急の対応にも関わらず、生徒の命を最優先にとらえ、即行動されていました。さらに、エアコン設置されている部屋の提供や精神的な配慮を工夫されている点に頭が下がる思いです。今回の津波警報において、最前線で指揮にあたられた校長先生方から、我々が学ぶべき貴重な示唆をいただきました。両校に御礼申し上げます。（広報部）